

京都外国語大学 ラテンアメリカ研究所 紀要

2020

<論文>

- Cambios diacrónicos en las actividades relacionadas con la obsidiana y su intervención por el Estado teotihuacano
..... 嘉 幡 茂 1
- Sistemas de abastecimiento de obsidiana entre el Estado teotihuacano y las sociedades del valle de Toluca
..... 嘉 幡 茂、ホセ・ルイス・ルバルカバ・シル、
フリエタ・マルガリータ・ロベス・フアレス 29
- ミチョアカン州プレベチャ高原地区の「共同体的先住民自治」
..... 小 林 致 広 61

<研究ノート>

- メキシコ湾岸地方におけるユーゴ、アチャ、パルマと呼ばれる石製品の研究
—ベラクルス州中部地方における発掘出土資料の分析から—
..... 黒 崎 充 89
- マヤ南東部地域、チャルチュアパ遺跡タスマル地区に遺る B1-1
複合建造物群の時期による変遷について
..... 柴 田 潮 音 111
- 戦前日本におけるラテンアメリカ研究(Ⅱ)
—大正末期～戦前昭和期における移民研究の進展—
..... 辻 豊 治 143

<調査研究報告>

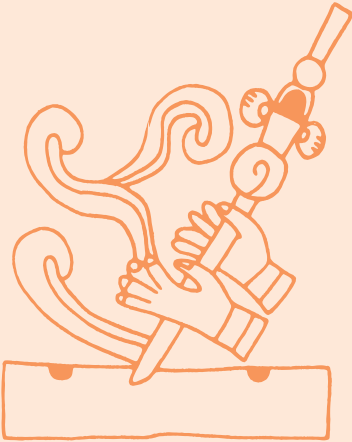
- Excavation at Nixtun-Ch'ich', Guatemala: Exploring the
Material Culture of the Chak'an Itza
..... 白 鳥 祐 子 167
- ニカラグアのカリブ海側における岩刻画の考古学調査および
コミュニティ・ミュージアム活動に向けた研究
..... 深 谷 岬、南 博 史、嘉 幡 茂、川 嶋 まどか 193
- 南米ボリビアのラパス県溪谷部のアイマラ語口承テキストとその考察
—近隣の村に実在した蛇娘の伝承—
..... 藤 田 護 215

<研究展望・動向>

- メキシコの地方選挙における野党台頭の始まり
—バハ・カリフォルニア州の地方選挙の事例—
..... 吉 野 達 也 243

<書評>

- 林 義勝著『スペイン・アメリカ・キューバ・フィリピン戦争—マッキンリーと帝国への道』
..... 牛 島 万 249



〈書 評〉
林義勝著

『スペイン・アメリカ・キューバ・フィリピン戦争
—マッキンリーと帝国への道』
(彩流社 2020年 355頁)

牛 島 万*

米国史における3つのリメンバーとは、アラモ砦事件（1836年）、メイン号爆破事件（1898年）、そして真珠湾事件（1941年）である。このうち2つまでがアメリカとラテンアメリカがかかわる戦争である。しかも、わが国におけるこの2つの戦争の先行研究の蓄積はさほど多くはない。本書は先のメイン号爆破事件、つまり米西戦争に関する論究である。これまでの著者の研究の総体性としてまとめられたものであるということだが、同時にわが国では米西戦争に関する研究書はほぼ皆無であることから、その意味でも本書がわが国における米西戦争論の記念すべきパイオニア的な研究として位置付けられると考える。この点において、本書の出版は学術的に極めて意義がある。目次と構成については以下の通りである。

はじめに

第1章 スペインとの開戦

第1節 19世紀後半のアメリカ社会

第2節 スペインとの開戦

第2章 キューバの保護国化

第1節 スペイン軍の降伏

第2節 プエルト・リコの占領

第3節 キューバ解放軍の解散

第3章 アメリカの対フィリピン政策

第1節 ハワイ併合とその統治

第2節 フィリピンの独立革命とアメリカの関与

第3節 休戦協定からフィリピン・アメリカ戦争の勃発へ

第4章 フィリピン・アメリカ戦争の勃発と展開

第1節 アメリカ政府とフィリピン革命政府の基本方針

第2節 フィリピン・アメリカ戦争の勃発と展開

第3節 フィリピン・アメリカ戦争の残虐性と人種主義

第4節 フィリピン・アメリカ戦争と黒人兵

第5章 反帝国主義運動と1900年の大統領選挙

第1節 反帝国主義者連盟の結成

* 京都外国語大学

第2節 パリ講和条約の批准
第3節 アトキンソンと『反帝国主義者』
第4節 サミュエル・ゴンパーズの関与
第5節 シクスト・ロペスの言論活動と反帝国主義者
第6節 1900年の大統領選挙と反帝国主義勢力
結論
あとがき
参考文献
註
索引

まず、本書の題名が目立つ。本書は、『スペイン・アメリカ・キューバ・フィリピン戦争』となっている。重要なことは、米西戦争というわが国で最も浸透している名称を用いていないことである。米西戦争という名称では本戦争の性格を明確に表わすことができないと筆者は考えていることがその理由である。第1に、本戦争のアクターとそれが行われた場所が複雑であり、それを正確に表現している戦争名称が適切であると考えられるからである。米西戦争では、アクターとして米国とスペインしか出てこない。加えて、戦争が行われた場所として、米国がスペインのいずれかを想起するが、本戦争はそのいずれの場所でも行われなかったことが重要である。本戦争はスペインの植民地であったキューバの独立戦争に端を発する、スペインとキューバの戦いに、米国が干渉し、最終的に米国はスペインと戦争し、これに勝利することによって米国はスペインからキューバを放棄させ、キューバ独立派を裏切って保護国にしたのである。この一連の戦争の経緯を踏まえたより適切な呼称ということであれば、これも一定の層に浸透しているが、「スペイン・キューバ・アメリカ戦争」でよいはずである。しかし、キューバでスペインとの独立戦争（第二次キューバ独立戦争）を繰り返している最中、フィリピンでもスペインからの独立戦争がすでに展開されていた。そして米国はこの2つのスペインの植民地の独立戦争に干渉し、最終的に独立派の希望を踏みにじり、キューバは米国の保護国、フィリピンは植民地にするのである。以上のことから本題目を「スペイン・アメリカ・キューバ・フィリピン戦争」とすることが最も適切であると筆者は主張している。

もう一つの理由として従来言われているのは、米西戦争は1890年代の米国の膨張主義のもとで行われ、それは1840年代以来の膨張主義を発展させた領土拡張主義であったと考える見解もあるが、その性格やアクターなどの違いから「帝国主義」(Imperialism)という別の名称を用いて区分する歴史の見解は既知のとおりである。いわゆる米西戦争は、この帝国主義の幕開けに位置付けられる戦争であったことがいえる。つまり「帝国」の名のごとく、海外植民地の展開という視点が明確にタイトル上で示されるべきであるという点では、本書のタイトルに異論をはさむ者は少ないはずである。

ところが、筆者のように、本呼称を本のタイトルにあげているものも実際にはそれほど多くない。「スペイン・アメリカ・キューバ・フィリピン戦争」を用いる筆者の意図を一般読者がどこまで汲み取ることができるかという問題が懸念される。それでも出版元が少々長い本タイトルを書名として採択したことに敬意を払いたい。

米西戦争自体は日本人の関心には早くからあったはずである。アルフレッド・マハンの海洋帝国論、シー・パワーは有名で、当時彼に従事していた日本海軍留学生の秋山真之は観戦武官として米西戦争を視察、サンティアゴ・デ・クーバ港港湾の入り口に大型船舶を沈没させて港内の船舶を内部に閉じ込める閉塞封鎖を実際に視察して学んだ。そして秋山は、これをモデルとしてのちに日露戦争の旅順港において閉塞作戦の指揮をとったのである。

他方、米国の帝国主義に関心をもつ学界の動向はわが国でも早くから見られた。そして、米西戦争はその帝国主義の一環をなす一大事件とみなされ、しかも地政学的に、明治時代以来わが国ではキューバよりも南方のフィリピンに対する関心が高かった。スペイン帝国、さらには米帝国主義から独立しようとするフィリピン知識人や人民に対する当時の日本人の関心は決して低くはなかったし、実際にホセ・リサールなども日本に滞在するほどの親日家であった。ただし、フィリピンを舞台にした本戦争は、米西戦争というよりも、フィリピン独立戦争（米比戦争）という名称で取り上げられることが多かった。また世界システム論のように歴史学に理論的アプローチを導入することが流行っていた時代、米国帝国主義の枠組みで米西戦争が取り上げられることも多かった。日本におけるその先駆的研究は、高橋章氏の『アメリカ帝国主義の成立史の研究』（1999年）であった。ただし高橋氏は米西戦争を取り上げていたものの、帝国主義や米国帝国論の一環として米西戦争をとらえていたために、米西戦争そのものだけを扱った研究ではなかったし、理論研究が中心であった。この出版の数年前に松田武氏が『このままでよいのか日米関係—近未来のアメリカ=東アジア関係史』（1997年）のなかで、一連の米国領土拡張主義の歴史の一環として米西戦争や門戸開放論について、氏の専門領域であるからにして詳細に書かれている。これらはいずれにせよ、本書が誕生するまでは、わが国における米西戦争に関する貴重な研究書であった。このようにわが国の米西戦争史は単独で扱われるというよりは、帝国主義や世界システムなどの何か大きな枠組みの中か、あるいは、米西戦争に付随する人種差別論（米西戦争期の黒人兵や兵士の男性性などの関連等）の論文がいくつか目につく程度で、米西戦争そのものにスポットをあてた探究があまり登場することはなかった。無論、スペインあるいはキューバからの検討はほぼ皆無であると認識している。この意味において、本書の著者である林氏がまさに米西戦争の詳細な通史を執筆したという点だけをもってもわが国の学界に大きな功績を残したことは確かだと思う。戦史知らずして戦争論は語れないからである。英語文献でしか知ることのできなかった詳細な通史を日本語で書かれたことに意義がある。しかも一般読者にも比較的わかりやすい平易な文体で詳細な内容が綴られており、これはまさに筆者の文才の賜物であり、そこにも著者の力量を感じるところである。

以上、記念すべき米西戦争研究の先駆的著作であるだけに、本テーマに大に関心のある読者からはやはり厳しい眼で見られるのは世の常であろうかと思う。45頁から48頁にかけてこれまでの研究史の概略が書かれている。著者は「多くの先行研究の成果を採り入れる形で」と述べていることからわかるように、理論的枠組みや視座については米国の帝国主義の成立と展開という枠組みのなかで通史を論じていることがわかる。だからこそ、そのあとで、これらに反対する反帝国主義運動についての論究がなされるのである。その際にシュルツ、アトキンソン、ゴンパーズ、さらにはロベスのそれぞれの反帝国主義に対する考えをまとめたうえで、反帝国主義運動が最終的に抵抗勢力としては脆弱で失敗に終わったと述べる。この理由は、筆者によると、反帝国主義派が統一した団体ではなく、派閥があり、一致団結できなかったことをあげている。そこで考え

られることは、当時の帝国主義や反帝国主義の規定があまり明確でなかったこともこの要因に関係にしていると考えられる。林氏が本書でとられている反帝国主義はおおむね次のことを指している。

海外に植民地をもつことは、有色人種に米国市民権を与えていくことであり、これにより、多くの有色人種が米国本土に来ることも考えられる。こうなると、人種差別の問題により今以上に社会は混乱することが予測できる。他方、市民には平等の権利を付与されるのが当然であり、肌の色は関係ない、という民主主義の理念との葛藤が反帝国主義者のなかにはあったという。ところで、反戦や人道的配慮といった側面から見る反帝国主義者も当然いたと考えられるが、本書では若干それが触れられているにすぎない。当時の反帝国主義の思想のなかにおそらく反戦思想はあったと思われるが、それがほとんど本書で記述されていないのはなぜか。当時の反帝国主義の実態を真に反映した結果だったのかどうか疑問に残るところである。フィリピンの民間人だけでも、米国軍の犠牲になったが歴史家ポール・クレイマーによると25万人もいたという。反帝国主義者連盟は、米国軍によるフィリピンの民衆に対する虐殺の横行の実態について、それを間接的に訴える、現地に派遣された兵士たちが家族に送ったとされる手紙を集めた『兵士の手紙』の発行、『ニューヨーク・イヴニング・ジャーナル』紙による10歳以上のフィリピン少年に対する処刑の挿絵(156頁)、水責めの拷問(166頁)など、著者は第4章第3節に詳細に述べている。このような反戦や人道的配慮という観点でマッキンリー大統領の政策を批判する反帝国主義運動があつてしかるべきだと思う。ましてや1900年の大統領でマッキンリーの再選が決まってからはより米国軍による残忍な行為は増えていったのである。その理由として、林氏によると、1900年の大統領選挙でマッキンリーの再選が決まってから、反帝国主義者は衰退していったからであった。そして、「その原因としては、そもそも反帝国主義運動の指導者たちは高齢者が多く、20世紀になってしばらくの間に世を去っていくことがある。また、アメリカ政府が、これ以後は新しい海外領土を獲得しようとする動きを見せなかったこともあろう。これは、逆に言えば、反帝国主義者たちの精力的な、アメリカ全体を巻き込んだ活動の成果だったと言えるのかもしれない。」(281-282頁)という結論では残念ながら一読者として不満が残る。米国の帝国主義は、領土の問題ではなく拠点の問題であることは、その後現在にいたるまでの世界中で米国軍が起こした諸事件をもつてみても明らかである。本評者はラテンアメリカを専門とする者であるが、ラテンアメリカの歴史のなかで米国政府や米国軍がどれだけ内政に干渉し、多くの犠牲を生んできたことであろうか。ラテンアメリカには米国の植民地はなくても、である(プエルトリコがその例外である)。ベトナムはどうか。イラクはどうか、ということである。本書を読んで、反戦運動は反帝国主義運動の中でどのように位置付けられ、もし反帝国主義思想のなかに反戦の側面が重視されなかったとすれば、その理由や背景について読者を納得させる言及がない限り、あの少年たちの銃殺の挿絵をわざわざ本書に載せた筆者の意図が理解できないのである。とはいえ、総じて、記念すべき労作であることは定かで、膨大な資料を使って通史を完成された著者に対して敬服する。本書から示唆されることは極めて多かった。

参考文献

高橋章

1999 『アメリカ帝国主義成立史の研究』、名古屋大学出版会。

松田武

1997 『このままでよいのか 日米関係—近未来のアメリカ＝東アジア関係史』、東京創元社。

Kramer, Paul A.

2006 *The Blood of Government: Race, Empire, the United States & the Philippines*, The University of North Carolina Press, Chapel Hill.

BOLETÍN del

Instituto de Estudios Latinoamericanos
de la Universidad de Estudios Extranjeros de Kyoto

Instituto de Estudos Latino-Americanos
da Universidade de Estudos Estrangeiros de Kyoto

2020

<ARTÍCULOS>

Cambios diacrónicos en las actividades relacionadas con la obsidiana y su intervención por el Estado teotihuacano

..... Shigeru KABATA 1

Sistemas de abastecimiento de obsidiana entre el Estado teotihuacano y las sociedades del valle de Toluca

..... Shigeru KABATA,

José Luis RUVALCABA SIL y Julieta Margarita LÓPEZ JUÁREZ 29

Retos para la autonomía comunitaria entre los municipios de la meseta purépecha, Michoacán

..... Munehiro KOBAYASHI 61

<ESTUDIOS PRELIMINARES>

Análisis de los contextos asociados con esculturas en piedra llamadas yugos, hachas y palmas en el Centro de Veracruz, zona costera del Golfo de México

..... Mitsuru KUROSAKI 89

Desarrollo constructivo del complejo arquitectónico B1-1 en el área de Tazumal de la zona arqueológica Chalchuapa en la Región Sureste Maya

..... Shione SHIBATA 111

Estudios latinoamericanos en Japón antes de la Segunda Guerra Mundial (II)

..... Toyoharu TSUJI 143

<NOTAS DE INVESTIGACIÓN>

Excavation at Nixtun-Ch'ich', Guatemala: Exploring the Material Culture of the Chak'an Itza

..... Yuko SHIRATORI 167

Estudio arqueológico de los petroglifos e investigación para los museos comunitarios en la Costa Caribe de Nicaragua

..... Misaki FUKAYA, Hiroshi MINAMI,
Shigeru KABATA y Madoka KAWASHIMA 193

Textos orales en aymara desde los valles del Departamento de La Paz, Bolivia: sobre una mujer de una comunidad vecina que da luz a una niña serpiente

..... Mamoru FUJITA 215

<INFORME DE INVESTIGACIÓN>

El inicio de la alternancia en la elección local de México: el caso del Estado de Baja California

..... Tatsuya YOSHINO 243

<RESEÑA DE LIBROS>

La Guerra hispano-norteamericano-cubano-filipina: McKinley y su camino hacia el imperialismo por Yoshikatsu Hayashi

..... Takashi USHIJIMA 249



Vol.

20